

本間 櫻／ほんま さくら 増毛町
生まれ。北星学園女子短期大学卒業。
2003年、創業120周年を記念して情
報紙「国稀かわら版」を編集・発行。
創業者・本間泰蔵の手帳の解読など、
貴重な歴史が網羅されており評判とな
る。好きなお酒は本醸造系の日本酒。



冬の仕込みが終わり春を迎える頃、しぼりたての新酒を待つ国稀ファンは多い。3月に開催する「国稀一杯やろう会～新酒まつり」の準備も企画室長である櫻さんの仕事だ

努力が評価され、2005年度
の「北海道赤レンガ建築賞」に歴
史的建造物として初めて選ばれ
ている。

「ただ、古い建物と新しい建物
がなじむにはまたかなりの時間
がかかるのです。その繋ぎ目では、
新しい建物の方が先に傷みだし
たり。建物の維持・保存はなかな
か難しいですね」

本間家130年の歴史と 向きあった2年間

北海道遺産に選定されている
「増毛の歴史的建物群」。その中
核となる建物が旧商家丸一本間
家だ。天塩国一の豪商と呼ばれ、
明治から大正を駆けぬけた本
間泰蔵。本間櫻さんはその四代
目であり、97年に町が購入・復
元するまで、旧商家に家族とと
もに暮らしていた。「住んでいる
時はあまり家の価値は感じませ
んでしたね。重要文化財とか取
りざたされるようになって、えっ
そうなの？ という感じで。その
うち、いろんな人が出入りする
ようになって、寝てる部屋まで見
られたり、けっこう心労はあり
ましたね」

櫻さんは札幌の高校に進み、
大学、就職と二時増毛を離れる。
町への譲渡が決まったことをきつ
かけに増毛に戻ってきた。「家か
ら家財道具や古い資料をすべて
運び出し、それを分類・整理する
という大仕事が待っていたのです」
お正月に使っていた器が骨董
品として値がつくことを考える
と、どこに貴重な資料や道具が
あるかわからない。本間家130
年の歴史と対峙する日々がはじ
まった。

「約2年かかりました。それで
もまだ膨大な帳簿類や手紙の
整理は終わっていません。そこを
ひもとくと、曾祖父・泰蔵の人生
や謎の部分に迫れるのでしょ
うけど」。しかし、櫻さんには次の
仕事、国稀酒造が待っていた。

「確かに家は残りしましたが、
そこには私たちの暮らした歴史
はもうありません。そんな気持
ちを引きずりながらの整理作業
だったので、心身ともに参った時
もありました。でも、仕事をは
じめて忙しくしているうちに気
持ちの整理もつきましたね。今は、
本間家を国稀の宣伝に利用しよ
うと考えるくらいになりました
から」と笑う。

伝来の酒蔵を開放した 新たな一歩

夏になると、国稀酒造は多く
の観光客でにぎわう。そのきつ
けとなったのは約15年前、店の前
に止まった1台の観光バスだった。

「ガイドさんがこは見学でき
るのかと聞いてきたそうです。私
たちは酒蔵を見学して何がおも
しろいのかと思いますけど、観光
客の方にはこの建物を見るだけ
でも驚かれるみたいで」。その後、
観光バスが定期的に訪れるよう
になり、最北の酒蔵は全国的に
有名になっていった。「お客様がた
くさん来てくれるのは有難いので
すが、私たちの本業はあくまで
も製造業なので、建物ばかりでは
なくお酒を評価してほしいのです。
昔ながらの作り方とかこだわり
とか、国稀のお酒を知ってほしい
ので、冬の仕込みを見学できるよ
うにしました」

本間泰蔵は呉服・荒物雑貨が
軌道に乗ると、ニシン漁業にも事
業を拡大する。その漁師たちに
飲ませるために酒蔵を造ったと
言われている。酒づくりは水が命。
暑寒別岳の伏流水は商人・本
間泰蔵の心をとらえたに違いない。